

体育哲学専門領域

高橋徹（岡山大学）・竹村瑞穂（東洋大学）・深澤浩洋（筑波大学）

1. あらまし

本コラムでは、本領域が年4回発行している『体育哲学専門領域会報』や本領域会員が『体育学研究』に寄稿した論文など、2015年以降のものを取り上げ、研究動向や最近の知見を紹介する。それは、本領域の研究者が「自らの言葉」で「体育哲学の実践」を念頭において発信している『会報』を紹介することによって、研究者の問題意識や研究態度を垣間見ることが可能になるとともに、論文からは本学会における本専門領域の研究対象や研究方法に触れることが期待できるからである。

2. 内外の研究動向

『会報』には、「体育哲学考」と「私の研究」の2つのコーナーがあり、前者からは各著者の体育やスポーツ、身体文化に対する見方や考え方を、後者からは、各研究者の問題意識などを窺い知ることができる。

ここ10年近くの動向を見てみて気づくのは、例えば「できない身体」への眼差しである。これを改善し、体力や身体技能の向上を目指す体育の文脈に乗せることとは別に、あるいはその前に、このような身体と向き合い、その存在を認め、体育教師なども含めた人間同士の関わりを見つめ直そうとの意識がそこには働いている。

今日のテクノロジーの発達（VAR判定、eスポーツ、ドーピングなど）を目の当たりにして、果たして我々の身体を通じてどういった教育がなされるべきか、といった課題意識もある。運動経験やその主体性を他者との関係の中で見直す営みとして体育を捉えるために、フッサーやメルロ＝ポンティの現象学、デューイの教育学、ルソーの教育思想、フーコーの権力論などが手がかりとされている。また、道徳倫理や生き方を問う姿勢にもこうした課題意識はつながっており、アリストテレスの実践学やカント倫理学を参照する研究も行われている。

また、スポーツを含む身体運動文化（ダンスや武道、芸道など）に対し、その実践に関しては東洋思想からのアプローチが、それらの社会的なあり方を巡っては、公共性や平和論などからの議論もみられる。

3. 科学的（学術的）知見の応用の状況

本専門領域における科学的知見（学術的知見）の応用状況としては、主としてスポーツ倫理学分野に多く見られる。昨今、プロ・アマ問わず、スポーツ指導やスポーツ活動における暴力・ハラスメント事例が散見されるが、このように根深い問題として存在する体罰、暴力、ハラスメントの問題をどのように捉え得るかという考察は少なくなく、また多角的視点から考察されている。さらには、よい指導を提供、展開していくためのコーチング哲学なども挙げられる。

あるいは、スポーツのゲームそのものに対する検討（スポーツにおけるゲームとはどのようなものか）を通して、スポーツのゲームの文脈における「意図的ファウル」や「失敗した試合とはどのようなものか」について考察する応用研究も存在する。

また、現代社会は高度テクノロジー社会と称されるが、テクノロジーとスポーツの関係について応用的に考察された倫理学的研究も存在する。たとえば、遺伝子治療技術を利用した遺伝子ドーピングの問題や、eスポーツの可能性、汎用性人工知能の応用可能性などについてである。

医・科学技術とスポーツは親和性があるが、どのような医・科学技術の知見がスポーツ界に恩恵をもたらし、あるいは制限されていくかなどの倫理的・哲学的考察は、今後ますます重要となっていると言える。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき知見

最近 10 年間のうちに『体育学研究』に掲載された本領域に関連する論文を紹介することで、学校体育や大学体育への有用な論点を提示したい。まず、本領域における研究の特徴の一つ目として、特定の哲学者や教育学者の理論から現在の体育への示唆を読み解こうとする研究が挙げられる。例えば、明治後期を代表する体育論者の高島平三郎（佐々木, 2016）、身体感性論（somaesthetics）の提唱者であるリチャード・シュスターマン（斐, 2018）、ルネサンス期に活動した人文主義者・作家・医師でもあるフランソワ・ラブレー（広瀬, 2022）、教育哲学者のジョン・デューイ（高橋, 2022）といった人物の論考が研究対象にされ、現在の体育の在り方を再考する視点が提示されている。次に二つ目として、体育という事象に潜在する問題を独自の観点で切り取り、体育に対する新たな見方やこれまでにない教育上の可能性を提示する研究もある。例えば、久保（2018; 2019; 2020）が展開した「生成としての身体教育」をテーマにした一連の研究では、「身体運動」が手段として把握され「発達の論理」と「有用性の原理」に支配されている現状に対する批判が述べられている。また、田中（2020）は体育授業で生じる「できる」「できない」問題に対して、あらゆる運動の大元となる〈できる〉という感覚が必要であることを明らかにしている。そして、坂本（2020）は「なぜ同じ指導言語を用いてもその伝わり方に違いが現れるのか」という問いを立て、体育授業において指導言語が児童・生徒に伝わるとは如何なる事象であるのかを明らかにしている。最後に三つ目として、岡田（2021）が発表したオリンピック・パラリンピック教育の普及過程に関する研究のように、現状の授業実践を批判的観点から分析することも本領域では試みられている。

5. 若手研究者へのメッセージ

本領域では、身体運動や活動といった身近な実践から哲学的に問うべき問題が探られている。今日的な問題・課題を一般常識に囚われない自由さや意外性でもって真に問うべき問題に掘り下げていく過程（そもそも〇〇と考えるべきなのか、他の見方や見過ごしてきた論点はないのかといった具合に）は、本領域の醍醐味である。この醍醐味を共有する場として、年に 3 回開催される定例研究会（5-6 月、12 月、3 月）、夏期合宿研究会（9 月）がある。それに惹きつけられ、元々は自然科学系の研究者が本領域会員となる例もある。コロナ禍以降はオンラインでの開催となっているが、対面やハイブリッド方式を模索し、大学院生のような若手研究者から年配の会員まで、幅広い世代での研究交流を通じてお互いの問いを深める機会としたい。また、そのためには、拠り所となる知識の共有や蓄積が必要である。その一助として、体育哲学やスポーツ哲学に関連する用語を掲載した e 事典の公開を予定している（2024 年度中）。現代社会には数多くの問うべき課題が山積しているが、本領域において、一度立ち止まり、じっくりそれらの問いと向き合い、掘り下げてみてはいかがだろうか。

6. 引用文献

- 体育哲学専門領域編（2015-2023）体育哲学専門領域『会報』Vol.19(1)-27(4).
<https://pdpe.jp/toukou.html>
- 体育学研究（2016-2022）61 巻-67 巻
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjpehss/-char/ja/>

（2024 年 7 月 14 日執筆）